

# パリ同時多発テロ事件と地域研究者

白杵 陽

二〇一五年一月二三日、「パリ同時多発テロ事件」が起こった。風刺紙『シャルリー・エブド』編集事務所が襲撃されたのが一月七日だったので、二〇一五年という年はパリというヨーロッパの中心都市で起きた連続テロ事件に象徴されるといってもいいのかもしれない。同時に、二〇一五年は第二次世界大戦が終結してから七〇周年でもあった。二〇〇一年のアメリカでの「同時多発テロ事件」以来、「テロとの戦い」あるいは「対テロ戦争」という名前の国家主体対非国家主体という非対称的な戦争が敢行されたが、それへの反発はグローバルなレベルにまで拡散し、以後ムスリムによるテロ行為が頻発して、「グローバル・ジハード」というような表現がメディアでも頻繁に使用されるようになった。

さて、オランダ・フランス大統領はテロ事件を受けて、フランスは「戦争状態にある」とし、非常事態宣言を行った。そしてフランスはIS（イスラーム国）がテロにかかわったとしてISに対する空爆をいっそう激化させたのである。まさにフランス版「対テロ戦争」の狼煙を上げたといってもいいだろう。だからこそ、今回の事件は二一世紀に入って起こった二〇〇一年のニューヨークとワシントンにおける「同時多発テロ事件」との連続性をもって語ることでできる事態でもある。

今回のパリにおける「同時多発テロ事件」は、二〇〇一年のニューヨークおよびワシントンでの九・一一事件、二〇〇五年のロンドンでの七・七事件に続くものであり、ムスリムによる大西洋を挟んだ欧

米社会の価値観への挑戦だと受け止められることになった。あるいはスペインのマドリッドで二〇〇四年に列車が爆破され、一九一人が死亡、二〇〇〇人以上が負傷した「三・一一事件」（スペインではそのように呼ばれているらしいが）をもこの一連のテロ事件の流れに含むべきなのかもしれない。

オランダ大統領の口からテロという野蛮な行為に対して「文明」という言葉が発せられたのであるが、二〇〇一年の九・一一事件時にブッシュ・ジュニア大統領が「十字軍」と口走ったことと相通ずるものがある。換言すれば、今回はNATO（北大西洋条約機構）への「グローバル・ジハード」の挑戦という対立図式が作られて、かつての「文明の衝突」論が再現されたようなかたちになった。九・一一時にはアメリカ対イスラームであったが、その後、その衝突はヨーロッパにまで波及し、西洋対イスラーム（the West v.s. Islam）といった拡大した二項対立になりつつある。その「西洋」の内実は限りなくイスラームに対するキリスト教の防衛的性格を帯びて、簡単にキリスト教対イスラームに転化しかねない危険性ははらんでいるようにも思われる。

この再版「文明の衝突」論では九・一一事件の時よりも、より深刻な様相を帯びている。パリでのテロ実行犯の一人がギリシア経由でフランスに入った「難民」であったためである。「アラブの春」あるいはシリア内戦以降、シリアやリビアから難民がヨーロッパ諸国に大量に流れ込んでいる。と同時に、この難民問題は欧米社会におけるムスリム移民の問題にも連動し、新たなかたちでのイスラモフォビア（イスラーム恐怖症）、すなわちイスラームあるいはムスリムへの嫌悪が欧米社会で蔓延することになった。その相乗効果によってマスメディアで「ホーム・グロウン（現地育ち）」の「ローン・ウルフ（一匹狼）」と称される組織的背景を持たない個人テロを生み出しているという特徴もある。アメリカのカリフォルニア州において起きた事件はその典型例であろう。

さらに、事件後の一二月にフランスで行われた州議会選挙では極右政党の国民戦線が勝利を収めて、

とりわけムスリム移民排斥の流れが促進されると同時に、イスラモフォビアもさらに拡大していくという悪循環も出てきている。人種主義は深刻化しているのである。

今回のパリでのテロ事件を少しばかり距離を置いて観察してみると、二〇一五年九月末から開始されたロシア軍によるシリア内戦への軍事介入が契機となって事態が動き始めていることが指摘できるであろう。というのも、ロシア軍はISを空爆するという名目で介入を開始し、地上戦ではアサド政権を支援するイランの革命防衛隊とレバノンのシリア派民兵組織ヒズブッラーがロシア軍と共同歩調をとるかたちで行動し、ISから現シリア体制の失地を回復したとも報じられているからである。

そのため、ISは劣勢におかれ、それまでの戦術を転換して、グローバル・ジハードも行うようになったという指摘もある。同時に、ISに忠誠を誓うテロ組織によるロシアへの報復が行われたりしている。エジプトのシナイ半島に拠点を置く「エルサレムの支援者（アンサール・バイト・アルマクデイス）」と称するグループがロシア機墜落の犯行声明を行ったところにも表れている。世界はいよいよ新たな局面に入ったともいうことができ、今こそ地域研究者の同時代を見る眼が問われているということなのかもしれない。

〔表紙写真〕

(大) ロシア／上海協力機構（SCO）首脳会議

(二〇一五年七月一〇日、©Photoshot／時事通信フォト)

(小) ロシア・ヴォルゴグラードの戦勝記念館にて

(二〇一〇年三月二六日、塩谷昌史撮影)

〔目次写真〕

上海の外灘から眺める浦東新区の夜景

(二〇一二年九月三日、中山大将撮影)